
龍の逆鱗

銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の逆鱗

【コード】

N0606Y

【作者名】

銀狼

【あらすじ】

小さな島国『大和』で忍となるために修行を積んできた少年、東龍斗。使いを頼まれて船旅に出たが、海上で嵐に遭ってしまう。気付いたとき、龍斗の前に現れたのは死んだと思われていた人物。辿り着いたのは、祖国の常識では計り知れない「異世界」だった。

第1話：四十九日明けて

季節は夏、山の木々は新緑に染まり、空には雲一つない青空が広がっている。東龍斗あずまりゆうとは一人山道を歩きながら、日光を透き通す木の葉などを何の気なしに眺めていた。島中を歩き始めたのは約二ヶ月前だが、その時とはすっかり景色が変わっている。時折聞こえる野鳥の声に、あの鳴き声はなんとという鳥だったかと思いを馳せる。だが今回はその思考を遮られた。

「よう龍斗」

「……何だ、遠矢か」

立ち止まった龍斗の前には一人の少年がいた。年齢十五、龍斗と同じ年に生まれ、同じ道を志してきた友人の一人、宮原遠矢みやはらとあや。突然声を掛けられたことで素早く身構えた龍斗だったが、黒髪に茶色い目の相手を認識すると警戒を解いた。それを見た遠矢は苦笑した。

「ははは、相変わらずだなお前は。家もそうだけど、生粋、ていうのかな」

「当たり前だ。いつ何が敵になるか分からんからな。とはいえ二ヶ月近くまともに動いてなかったら流石に駄目だ。気付くのが遅れたし、気が散ってた」

ため息交じりに首を横に振る龍斗。それを見た遠矢も一つ息を吐いた。嘆息ではない。寧ろ安堵あじむした様子である。

「安心した。龍誠殿りゅうせいが亡くなった後大分落ち込んでたからなあ。心配して損したぜ」

「そりやどうも。まあ四十九日も終わつたし、今日からまた修行を再開するつもりだ」

「……大丈夫か、本当に？」

心なしか暗い声色の返答に、遠矢が念を押す。

「大丈夫だよ、なんのための四十九日だ。じゃな、俺行くわ」

龍斗は笑いながらそう言うと言いつと山道を降りていった。後に残された

遠矢はその後ろ姿を見ながら呟く。

「……こつちだつて忍を目指してる身だ。目が笑つてねえことくらい分かるつてんだ馬鹿野郎」

龍斗の目を思い出しながら、それでも彼を追いかけることなく山道を進んでいった。

龍斗の家は忍としてそれなりに優秀な家であった。祖父の龍誠、父の遼しゅういちもまた忍として働いていた。物心ついた時から忍に憧れ、忍の道を志すのは自然なことだった。

山を下りた後、自分の家の前を通り過ぎて大通りに出た龍斗。町の人々はいつものように商売をしていた。お客様は神様だ、という精神で誰に対しても丁寧な、円滑に会話を交わしている。

(けどこれも、一度豹変したことがあったな)

龍斗は思い出した。街行く人々の目は黒か茶色。だが龍斗はどちらでもない。一見すると黒に見えるのだが、近くでよく見るとそれは青みがかかった深い色、藍色であることが分かる。それは別に問題ではなかった。だが彼の母親の存在が問題だったのだ。この街にとつては、母が異質だったのだ。

異国から流れ着いたという母はこの国にはない金髪、青い目を持つていた。その後家族全員で村八分を受けた。人は異質を排除しようとする。それが分からなかった龍斗はただ悔しさに涙を滲ませた。父と祖父の口論が記憶に残っている。真剣を持つての死闘が繰り広げられたことも覚えている。時間が経つて母という人間が理解されていくと村八分もなくなった。

龍斗はいつの間にか左手で片目を押さえていることに気付いた。軽く首を振って歩き続け、目的地に到達する。

そこは修行場と呼ばれる場所で、何も無い広場で何人も人が手

合せを行っているのが見える。それを横目に、龍斗は一つの小屋に辿り着いた。玄関先に立っていた人に名を名乗る。

「東龍斗です」

「おお、待つとつたぞ。この度はその」

「もういいですよ、その挨拶。聞き飽きましたから」

「……そうか。なら早速じゃが一つ頼まれてくれんか」

龍斗と話していた人物、藤堂源二は一つの手紙を取り出した。見た目はただの杖をついた老人だが、かつては忍の最高位にいたこともあるという人物である。師範として若き忍を育てる今もその力は衰えていない。杖もただの杖ではない。中には鋭利な刃が隠されているのだ。性格もそれに似たようなもので、穏やかで気さくな所もあるが、忍という道に関しては一切妥協を許さない。自然災害など致し方ない障害に阻まれた時も情を捨てて忍を辞めると切り捨てる、厳格な性格である。そのふるいにかけられて忍になることを諦めた人間が多くいることを龍斗は認識していた。

「この手紙を御蔵島の時田さんとここに届けてほしい」

「分かりました。出来るだけ早く届けるようにします」

「ほっほっほ、まあそんな急ぎでもない。他所の国の様子でもゆっくり見てくるがいいさ。それが復帰第一号の修業じゃ」

源二はそう言って小屋へと消えていった。龍斗は首をかしげた。手紙の裏を見てみたり、日にすかしたりしてみるのが、特に変わったところはない。

結論が出たのは龍斗が自分の家に帰ってからだだった。家にはもう誰もいない。その事実がきつかけだった。

（そうか、この島を出て、他所を見て気を晴らせと。藤堂さんらしい不器用なやり方だ）

口角の一端を上げながら龍斗は家に入った。

第2話：船出の時

翌朝、龍斗は一人旅支度を整えて家を出た。いつもの格好に、父の形見である太刀、祖父の形見である脇差を身につけて誰もいない大通りを闊歩する。今はまだ日の出前、よほどのことがない限り人は起きていないことはない。左肩に担ぐ麻袋には最低限生活に必要なものを入れた。母が作ったこの袋は二重構造になっており、袋の中にさらに小さな袋が付けられていた。大きさがちょうどよかったので手紙はそこに入れてある。路銀　旅に必要なお金のことが有り金全てを持っていくことにした。何時何でどれだけ必要になるか分からないし、家に置いておいても得はない。寧ろ泥棒に盗られる心配がある。知らない間に盗られてました、より自分で持って賊に狙われる方がまだ救いがある。

（それに金は無くて困ることはあっても有って困ることは……あるな、やつぱ）

歩く度に音を立てる腰辺りに目をやる龍斗。そこにつけられた巾着袋には金、銀、銅で作られた貨幣が入っている。ここ玲角島、これから向かう御蔵島、その間にある徳間島以下数個の島からなる国『大和』で流通しているお金である。金が最高価値に定められているために物価が安定しやすいのだと誰かから聞いたことがある。それはいいのだが、問題が一つあった。貨幣とはいえ金属は金属。持つ金額が増えれば増えるほど荷物が重くなってしまうのだ。

（まあいいか、ほんとに盗られるよりはましなんだから）

道は大通りから横道にそれ、森の中へと続いていく。草木が生えていないその道を進んでいくうちに、磯の香りが強くなってきた。やがて森を抜けると、そこには白い砂浜と、赤く染まり始めた朝焼けの空、そしてその光を反射し白い波を立てる大海原が画面いっぱい

いに広がった。龍斗はそこから左に移動していった。やがて大きな小屋と棧橋が見えてきた。龍斗は小屋の前に立ち、扉を数回叩いた。海に出るにはこの貸船屋で舟を借りる必要があるのだ。

「はいよ……ああ、龍斗君かい」

眠い目をこすりながら戸を開けたのはご主人。巾着から銀貨二枚を取り出し男に言う。

「御蔵島まで行くから、出してもらえますか」

「へえ、そりやまた遠出だねえ。なら帆かけの方が良い……でも悪いな、金一、銀一になっちまうぜ」

「んー……まあいいですよ」

龍斗は巾着の中身を探り、金貨を探し出して主人に渡す。

「やっぱり舟は高いですね」

「まあな、他所の島に行くにはこれか自力で泳ぐかしないと。それと原因はやっぱり野分と鮫だな。あれに出くわした舟がぶつ壊れたり、かなりの損傷受けたりで、もう修理代が馬鹿にならん」

神妙に頷く龍斗。実際彼が覚えているだけでもかなりの数の舟がその被害にやられている。一部が割れて沈没しかけていた時もある。見送った船が木片と化して帰ってきた時もある。被害にあうのは舟だけではない。それに乗っていた人間も、なんとか無事に帰ってくる者、波に襲われ溺死した者、舟ごと行方不明になったままの者もいる。その中には龍斗の親族や友人も含まれている。そして彼は今後そうなる可能性のある人物である。決して他人事ではないのだ。

棧橋に出て待っていると主人が舟を出してきた。中央には一本の柱が立っており、折りたたんだ白い布がその下にあった。龍斗は主人と共に舟を後ろから押していき、海に浮かべて乗り込んだ。

「風があつたら帆を張つとけ。艫かいや櫂かいで行くより楽だからな。何かあつたら近くの船屋に寄れ。舟つてのは組合で共有してるもんだからどこのどの舟でも一緒だ」

わかりました、と返事をして舟の後ろにある艫を漕ぎ始める龍斗。手を振って見送ろうとした主人だったが、手を挙げようとした瞬間

あることに気付いて龍斗に叫ぶ。

「おい！！」

その声に反応した龍斗が振り返ると、何か光るものが飛んでくる場所だった。思わず掴みとったそのを開くと、龍斗の目は皿のようになくなった。投げられたのは自分が支払った銀貨。何故これ？ その疑問を口にする前に、投げた本人が声を張り上げた。

「進水式代わりだ！！ 生きて帰ってこいよ！！ 良い旅を！！」
思わず笑みを浮かべた龍斗。大きく手を振っている主人に手を振り返し、龍斗はまた櫓を漕いだ。

いつの間にか空には白い雲が浮かんでいた。龍斗は人差し指を立てて唾をつけ、目線の高さを持つていった。風が当たるとそこだけ冷気を感じる。こうして風向きを把握した龍斗は、次いで進行方向を確認した。出発した玲角島は後ろ、太陽は少し高度を上げたもののまだ東にある。そして前方に小さく見えるは中継地点の徳間島。その島の船屋にこの舟を任せ陸地を移動、反対側の船屋でまた舟を借りる。そしてようやく御蔵島へとたどり着く。払ったお金は御蔵島までの往復にかかる料金である。いちいち支払いをしていてもいいのだが、まとめて支払うと幾らかおまけしてくれる。組合員による証明証を見せればこの方法でも問題はない。その証明証は麻袋の中、手紙と同じ場所に大事にしまつてある。

龍斗は帆を張ることにした。航路に対して追い風という絶好の機会を逃すわけにはいかない。白い布が上がると、それまでよりも速い速度で進んでいった。龍斗はふと振り返り玲角島を見た。既にかなりの距離を進んでいたが、まだ島は視認出来た。一つ息を吐くと心の中で島に語りかけた。

(暫く離れる。ま、すぐに戻るさ)

進行方向に間違いがないことを確認して、龍斗は舟に寝転がった。これが、龍斗が見る最後の故郷の姿であるとは知らずに……

第3話：極楽浄土か奈落の底か

何処だ、ここは……

龍斗は薄く目を開けた。視界がぼやけてはつきりせず、色しか認識できないでいた。だがその色も白一色しかない、と思った瞬間に黄色い色が現れた。青い点が現れたと思うと、すぐに振り返って何を叫ぶ。

(……ん?)

龍斗はそこで違和感に気付き、数回の瞬きをした。視界がはつきりした瞬間、龍斗は文字通り跳び起きた。その勢いのまま足裏をついて体を起こし大きく跳躍、着地と同時に片膝をついて振り返った。突然のことに啞然とした様子の男女がそこにいた。藍色の鋭い目が二人を捉え即座に判断する。

(立ってる男は茶色の髪、特に武器は持っていない。座ってる女は口元に手を当てている。髪は金で目は青い……ん？ 青眼金髪?)

龍斗が眉を顰めたのと、新たな人間が入ってくるのとはほぼ同時だった。

「目覚ましたって!？」

「ホントに!？」

声の主に目を向けた龍斗は顔を認識した瞬間に驚愕した。普段は滅多に素の表情を見せない龍斗だったが、この時ばかりは違った。

「連、それに、霞……ああ、そういうことか。で、ここはどっちだ。極楽浄土か、奈落の底か」

一人納得する龍斗の言葉を聞いた二人は顔を見合わせる。その後しばらく暫く二人の笑い声が部屋を占めることとなった。

「いや悪かったよ。あんな真剣な顔で言われたらさ」

「目が覚めたら死んだと思われてた人間がいる。死んであの世行き

を考えて何が悪い」

「あーひどーい、あたしを勝手に殺さないでよー」

「大和じゃもう死亡扱いになってるっつーの。行方不明になってから何年経ったと思ってるんだ」

気分が落ち着いた龍斗は今自分が寝かされていた寝台に座り、後から入ってきた二人　烏丸連からすまれんと斉藤霞さいとうかすみを相手に話をしていた。二人とも龍斗と同じ国で生まれ育ってきたが、何年も前に行方不明となり、国内では既に死亡したものと看做みなされていた。だが今こうして目の前で生きている。夢でないのは、傷む左足が証明していた。そのことを問うと連が丁寧に教えてくれた。

「龍斗はさ、舟に乗って海を渡ろうとしたんだよね」

「ああ、そうだ」

「で、突然の嵐　野分に遭った」

「ああ、そうだ」

「で、荒れ狂う波に襲われてるうちに気絶してしまい、気が付いたらここに流れ着いていた」

「ああ、そうなるな」

「俺たちも一緒なんだよ。普段なら全く問題なく渡れる航路を進んでいったのに、突然の野分、訳の分からない海流、進路の間違い、様々な原因を経てここに流れ着いた。そして助けられた」

「あたしもそうだよ、と。はい終了」

左足の包帯を取り換えていた霞が作業を終えて立ち上がった。

「悪い、ありがとな」

「どういたしまして、お兄ちゃん」

礼を言った龍斗だったが、霞の返答を聞いて背筋に寒いものを感じた。

(こ、こいつ……あ、そうか、こいつもあの一派の一員だったか)

霞は悪戯心に満ちた笑顔でこちらを見ている。一方の連からは疑問の念がひしひしと伝わってくる。ちっと鋭く舌打ちしたところで横から白い手が伸びてきた。

「仲がいいのね3人も。はい、どうぞ」

「あ、有難うございます」

それは最初から部屋にいた金髪青眼の女性だった。白い小さな器を受け取ると、両手から温もりが伝わってくる。湯気を立てている中身を見ると、同じく白い水のようなものが入っている。

「ホットミルクよ。体が温まるわ」

「ほっと……みるく？」

言葉に違和感を感じたが、他の二人は全く気にしていない様子で中身を飲んでいる。龍斗もそれに倣って器を口元に運んだ。

(……美味しい)

ほのかな甘みが口に広がり、熱が体の芯を通っていく感覚を味わう龍斗。そして、器の中身の正体にも気づいた。

「これ、牛乳か」

「そう、牛乳に砂糖を入れて温めてあるんだよ。大和にはないよねこういの」

霞が笑って返してきた。ホットミルクを半分ほど飲んだ後、龍斗はあることに気付いた。左手の人差し指を親指に引っ掛け、手に持った器の端を軽く弾くと、キンという澄んだ音が響いてきた。

「陶磁器の小さな器……これ、『コップ』てやつか？」

「正解よ、よく分かったわね」

渡してくれた女性がそう言った。龍斗は数秒目を閉じた。再び目を開けた時、彼の頭の中では気が付いてから今までに得た情報が整理され始めていた。

(舟による難破、漂流。過去に同じように流された奴らの一部が生きてる。馴染みのない調理、陶磁器製の器コップ。何より……金髪青眼、母の言葉)

「そうか、此処が……母が元いた世界、異国か」

まったく無意識のうちに龍斗の口から結論がこぼれ出た。

だが龍斗には一つ疑問に残ったことがある。連や霞は答えを知っている。それで率直に聞くことにした。

「ここが異国なら言葉は通じないとかあるんじゃないのか、確か」
うる覚えの情報の真偽を確認する龍斗。今までの流れから考えて金髪青眼の女性は龍斗から見ると異国の人間。そして大和の者と大和の言葉を用いて会話をしている。自分も聞いて受け答えしたのだからこれは紛れもない事実である。だが彼女以外はどうかだろうか。もし方言のように言語の違いがあったらどうすればいいのか。そう言ったところを聞いたのだ。

「ああ、それね。龍斗は聞いたことないか？ 今の和に繋がる系譜の国が遙か昔に全ての陸地を支配したって話」

「端的に言えば、それは事実でしたって言うことになるわね」
連の話を霞が締めた。連が言ったのは和に伝わる有名な言い伝えのことだ。全ての陸を支配し、言葉も通貨も文字も、全てを統一したまさに天下一の英雄伝。最初聞いたときは眉唾物だったが、ここにきて何年も経過している彼らがそう言うのなら事実だったのだろう。彼らが嘘をつく利点もない。

「まあ文字は大和でも使う漢字ひらがな以外に、カタカナやアルファベットってのがこちら独自の文字としてあるんだけど。あと数字かな、漢数字じゃなくてアラビア数字使うよ」

龍斗は頷いた。幼い頃から異国出身の母によく言われていたことである。

「分かった。意思疎通については問題ないんだな。じゃあ次に……」

第4話：家族の形見、忍の名乗り

「じゃあ次に、俺の荷物は？」

「ああ、そのテーブルの上にある。ちよい待ってな」

連が椅子から立ち上がり、寝台の横にあつた棚のような物の所へ移動する。腰くらいの高さがあるその上に麻袋が置いてあつた。その台の横には太刀が立てかけてあるのも見える。そう、父の形見として持ってきたあの太刀である。

連が戻ってきた。椅子に座りながら龍斗に袋を渡す。

「はい、これ。一応中身確認して」

龍斗は言葉が終わる前に袋を開け、中身を確認していた。着替えの服、金の入った巾着袋、非常食の兵糧丸、中にあるのは龍斗が入れたものと同じ。極めつけは中にあるもう一つの小さな袋。

「お、この麻袋、ポケット付いてたのか」

どうやらポケットと言うらしい。龍斗はそのポケットから手紙と証明証を取り出した。手紙に書いてある差出人の名前は藤堂源二、証明証にもあの貸船屋の主人の名前が書いてあつた。何より、龍斗にとつて最も大切なものを見つけることができた。

「ああ、良かった……爺さん、母さん、美夜」

手に取つたのは形見の品。祖父が持ち歩いてきた脇差。妹の美夜が愛用していた簪^{かんざし}。母が首に巻いていた細い鎖。金貨のような色で輪になっており、真ん中辺りには貝を象^{かたど}つた飾りがついている。

「あら、ネックレスなんて持つてるの？」

「ん、どれも。おお、本当だ。異国にもあつたのかい？」

金髪的女性と茶髪の男性が母の形見を見てそう言った。

「これ、ネックレスっていうんですか？ いや、大和にはこんなものはありませんよ」

「じゃあなんで？」

男性が首を傾げた。存在しないはずのものを何故持っているのか。

当然の疑問である。

「母が持ってたんです。ここからは俺の想像ですが……恐らく母は元々こちら側の人間だった。だから、こっちにしかないものを持っていた。こっちの知識も知っていた。多分俺らとは逆に、こっちから大和へ流されたんだ。で、父さんと結婚して俺が誕生、そんなとこだな。それと連、霞が流された後ずっとこっちで暮らしていた事を踏まえると……」

注目する四人の顔を一瞥し、龍斗はため息をついた。

「やっぱ、大和には戻れないんだろっなあ」

最後の推量に連が言葉を返した。

「多分、それであつてると思うよ。実際こっちじゃ金髪青眼の人は多いし。ただ一つだけ訂正。確かにこっちから向こうに帰るのはほぼ無理だけど、向こうからこっちに来るのは案外難しい話じゃない」
「……どういうことだ？」

龍斗の目は連を捉えた。続きの言葉に耳を傾ける。

「あの辺には独特な海流があつてね。トリトン海流っていうんだけど、その流れの方向が大和からこっちに向かつて大きな渦を巻くように流れているのさ。それに乗って上手く離れられればこっちに辿り着くことができる。但し、あまりに深いところに乗ってしまうと渦から逃れられなくなって結末は沈没しかない。そして流れは一方通行だからこっちから大和方向へは行けない。極稀に別の海流とぶつかって流れが止まるっていう話もあるけど、それが起こるのは何百年に一回とか言われているし、都市伝説みたいなもんだと思つた。けど」

「その何百年かに一回の海流に乗って、母さんが大和に来たと考えれば辻褄は合う、か。都合も運もあつたもんじゃねえな」

いつ発生するか分からない海流に偶然遭遇し、異国の者を受け入れる父に出会う。奇跡としか言いようがない、と龍斗は思った。

「でも東君、海流に乗ってきちゃったんだよね。きつとご家族も今頃心配して」

「ばっ、おい!!」

霞の言葉を聞いて慌てて止めに入った連。だが話の肝心な部分は既に言ってしまったている。龍斗は苦笑した。その表情はどことなく陰りが見える。

「いいよ、連。隠したって仕方ない。去年のことだから、お前はまだいたけど、その前にもう霞はいなかったからな。家族は死んだよ。父、母、妹は土砂崩れに巻き込まれて、爺さんも二ヶ月ほど前、老衰で亡くなった」

「あ……ごめん……」

「マジかよ、龍誠殿まで……」

部屋を沈黙が支配した。見知らぬ男女も家族の死という話題で言葉が失っている様子。

「あ、でも、そう、だから俺は大和にはもう未練はない。帰ったところで何にもないしな。むしろこっちに来て良かったかもしれん。心機一転だな」

その笑顔は大和にいた時、宮原遠矢に見せた顔と同じだった。顔から相手の心情を読むという忍の修行を積んでいた霞だけでなく、その修行をしていない連や男女にも龍斗の本心は伝わってしまった。空気は部屋の空気をさらに空しくさせるといふ結果に終わった。

その後暫くして、連、霞は部屋を出ていった。ふと見ると、頭上に見える壁の一部に穴が開いており、そこから茜色の光が部屋の中に差し込んでいた。この家の主であるという二人組もいつの間にか部屋を出ていた。

龍斗は一人寝台の上で仰向けになっていた。だがその目はすぐそこに見える天井を見てはいない。

(何やかんや言っても、俺はこっちの世界のことを知らない。明日からその辺を学んでいくしかないな)

扉を叩く音がした。はい、と返事をすると金髪の女性と茶髪の男性が入ってきた。女性が両手で運んできたものをテーブルに置いた。どうやら食事のようだ。体を起こし、寝台から足を下ろして座る龍斗。

「はいどうぞ。あなたの分の夕食。ちゃんと食べないと回復は遅くなるわよ」

「すみません、色々世話になってしまって」

「はは、構わないよ。困ったときはお互い様、だっけ。そう言うんだろ、ヤマトでは」

男性の方が笑いながら言った。一瞬龍斗は目を見張ったが、すぐに戻した。考えてみれば自分が来る前から何人もの大和人が流れ着いていることだろう。言い回しが伝わっていても何ら不思議ではない。

「有難うございます。えっと……」

お礼を言おうとしてはたと気づいた。この二人の存在を認識してからかなり時間が経ったが、一度も名前を聞いていない。そのことに気付いた男性は申し訳ないといった様子で頭を掻いた。

「あ、すまない。あまりに楽しく会話してたもんだから、口をはさめなくてね。僕はトマス・デイビス。トマスが名前で、デイビスが名字ね。年は42歳だよ」

「私はベラス・デイビス。この人の妻よ。年は……あまり言いたくないけど34歳。よろしくね」

龍斗は素直に驚いた。見た目だけの判断では龍斗はもつと若いと思っていたからだ。しかし年齢判断は特に重要なことではないし、元より外すことの方が多い。なので今回も龍斗は判断の間違いを気にしなかった。

龍斗は立ち上がり、初めて男女を見た時と同じように片膝をついた。元々左足を立てる癖がついているので、体重を右足にかけると痛みはさほど感じない。正座や立礼も知っているが、足への負担を考えればこっちの方がいい。それにこちらでの礼儀はほとんど知ら

ない。故に自分が一番よく理解している忍の礼儀を選択したのだ。

「東龍斗……いや、リュウト・アズマ、齡十五。以後宜しくお願
い申し上げます」

第5話：「異世界」

木製の扉を開け放つと、そこは異世界であった。勿論^{もちろん}比喩的表現ではある。龍斗は海を渡っただけで世界を渡ったわけではない。だが目の前に広がる景色は、元いた大和と比較するとあまりにも違いすぎていたのだ。

快晴の空の下、雲を全て大地に引きずり下ろしたかのように街が白い。龍斗は2〜3段の階段を下りた。足元を見てみると床も地面が露出せず、何か敷かれてやはり白くなっている。降りきったところで後ろを振り返る。今しがた龍斗が出てきた建物も例外なく白かった。

そうして建物の壁を見ているとき、龍斗の第六感が何かの到来を知らせた。すかさずその気配の居所を探る。忍として生きるためにはどんな些細な変化でも見落としてはならない、その教えが身に染みているのだ。

（2人、1人は軽く走ってきてるか。多分……）

「霞だろ」

すぐ後ろにまで来た気配に、振り返らないままそう言った。気配の主はそれを聞いて身震いした。

「お、おはよう東君、な、なんで分かったの？」

「お前も忍目指してたんなら分かるだろう、つと」

言いながら振り返った龍斗は、霞が着ている服に驚き言葉を詰まらせた。桜の花のような色の袖が短い上着、足を見ると白い袴のようなものははいているが、その長さはかなり短く、膝まであるかないかというところ。履物も草履ではない。栗のような色をして、足全体を覆うような作りとなっている。

そうして観察しているうちに、さっき感じた内のもう一つの気配がすぐ傍まで近づいてきた。龍斗はまた姿を確認することなく正体を言い当てる。

「遅かったな連」

「おつ、いや、霞が勝手に走ってっただけだよ。後ろ向いてたから脅かそうってな」

「だと思った。脅かすのなら成功してるぜ、つと……お前らのその格好で」

霞の向こうにいる連に目を向け、またその格好に言葉を詰まらせる。連の格好は霞の色違いとも見える青い半袖の上着、下は二本の筒に足を通す感じの物をはいている。因みに色は黄土をかなり薄くしたような色だった。昨日会った時には全く気付かなかった、というより格好にまで気が回っていなかった。

「ああ、そうか。この上着はシャツ。下にはいているのはズボン」「あたしがはいているのはスカートだよ」

聞けばこちらではこの格好が普通なのだという。異国の神秘だ、と龍斗は思う。だが今はそれを学んでいかなければならない。目的地に向かう間、取り敢えず龍斗は根本的などころから聞くことにした。

「そついや昨日散々こつこつちて言ってたけど、ここつて何処なんだ？」

すると連は少し意外そうな顔をして口を開いた。

「小母さんから聞いてないのか。ここはランドレイク大陸って名前だよ。文字通り、大和とは比べ物にならないほど大きい陸なんだ」

「その中で最も東に位置する、つまり大和に一番近いのがここ、『商業都市国家オリジア』だよ」

途中から霞が説明に加わった。龍斗は記憶を辿ってみたが、母から大陸の名前を聞いた覚えは無かった。気を取り直して次の質問に映ることにした。

「やけに白い街だけど、これ建築資材は何だ？ 同じものが足元にも敷いてあるし」

「大陸の家は大抵が石造りだよ。木製の家もあるけど、大和にあつたような茅葺き、瓦屋根、漆喰とかは無い」

「敷いてあるのも石を加工したものだよ。その町の中で重要な道は大抵こうなってるね。例えば王様の住む城に続く街道とか。あ、ここには王様はいないよ。ここは商人達が統治してるから」

「へえ、商人がね」

「それもこれもここに経済の大事な拠点があるから……あ、着いたよ。ここ」

三人は石畳の街道の終着地点に来ていた。そこにあつたのは他の建物とは比べ物にならない程大きな建物。ただ大きいだけでなく、所々に曲線を描くように石が並べられていたり、壁石の表面が綺麗に磨かれていたりとかかなり手の込んだ造りがあり、この街の象徴ともいえる存在感を放っていた。その荘厳さに思わず唖然とした龍斗だったが、入口前の屋根を支える柱に気付いた。

「なあ、あの柱はなんで赤いんだ？」

「ああ、あれは煉瓦っていうの。土を焼き固めて作ったものだよ」
霞の情報によると、石の代わりに煉瓦を使って建てられた家もあるとのこと。その説明の後、霞は入口の上を指さした。龍斗もその方向に目を向ける。

「あれが銀行の印。^{マユク}黄色い大きな円に模様、つまり金貨を表しているの。で、その下にアルファベットでBANK^{バンク}って書いてある。分かった？」

「なるほど、絵で何の店が分かるのか。中々便利だな」

「ここで連が気になったことを口にする。」

「そう言えば龍斗、アルファベットの綴り読めるのか？」

「母さんが大陸の人間だったからな。小さい時から読み方と文字くらは教わってた。読みは自信がないけど……左からブ・ア・ン・ク、でバンクだな。なんとなく分かる」

「なら大丈夫だ、と連は笑みを浮かべた。彼は扉の持ち手に手を掛けると、ゆっくりと押して中に入っていく。龍斗、霞もそれに続い

て銀行の中に入った。

第6話：銀行の信用

中の様子を見ると改めてその広さを思い知らされた。壁際には5人が一度に座れるほどの長椅子が所々に置かれている。真ん中には木の台を横に長くしたようなものが3辺を囲い、その内側では異様に同じ格好をした男女が客の応対をしていた。

「空いてるカウンターは……あつた。行こう、東君」

霞に腕を引つ張られながらカウンターの一角に立つた龍斗。向かいにいた黒い上着の女性が事務的な声で応対した。

「いらつしゃいませ。本日はどのようなご用件でしょうか」

無表情で眼鏡の奥から睨むような視線を向けられた龍斗。だが龍斗にはその質問に対する答えを持っていない。お金を預けるといふ目的は伝えられているものの、具体的に何をすればいいのかまでは聞かされていないのだ。

助け舟を出したのは連だった。

「こいつの口座を新しく作りたい。今までに利用経験はない」

「かしこまりました。少々お待ちください」

どうやらこれが目的らしかった。去り際に、

「後は向こうの言うようにしてね。預金を忘れずに」

と耳打ちしていった。連に向けた視線を受付係に戻すと、ちょうど一枚の紙を出してきたところだった。

「ではまず、こちらの欄にお名前と年齢をお願いします」

龍斗は一本の鳥羽を受け取った。いつの間にか台の上には透明な容器と、金属のような光沢をもつ薄い板が置いてあった。中には黒い墨のようなものが入っている。

（墨と筆、か？）

その前提をもって龍斗は羽の先を液体につけた。垂れないように容器の端で余分を落とし、板に『東龍斗 15』と書いた。年齢は漢数字で書こうとしたのを寸での所で思い留まった。板を見せると

受付係は文字を確認し、再び龍斗に返した。

「申し訳ありませんが、漢字名の場合はフリガナをお願いします。読み方が特殊な場合などありますので」

納得した龍斗は漢字の上に『アズマ リユウト』と付け加えた。自分の名字、東と書いて『ヒガシ』ではなく『アズマ』と読ませるのは人名地名だけの特殊な使い方だからだ。

もう一度提出すると、

「アズマ リユウト様ですね」

と確認が入り、返却されることはなかった。続いて彼女が出してきたのは針山と奇妙な水晶。水晶の中では黒い砂のような粒が、水に流れるように渦巻いている。針山から一本の針を抜き、受付係が言う。

「では、リユウト様の血を提供して頂きますので、手を出して頂けますか」

「血、ですか？」

思わず聞き返してしまった龍斗。彼女は至って平静な声で説明する。

「はい。大陸全土のお金の動きを管理する場所なので、銀行と契約者の間には信用がなければなりません。その信用のために、血液を用いた契約を行います。銀行側は預かったお金を責任を持って管理すること、及び必要の際には融資、即ち銀行のお金をリユウト様にお貸しすることをお約束します。リユウト様にはその代償として、通貨の価値を疑わないこと、銀行を疑わないこと、また融資を受けられた場合は、定められた期限までに借りた金額に加え、その1割に当たる額を利息として支払うことが求められます」

龍斗は左手を出した。失礼します、と断った彼女が人差し指に針を刺す。一瞬の痛みの後に出てきた赤い液体を謎の板と水晶に垂らす。すると、板が血を吸収しているのか赤い円の範囲がみるみるうちに小さくなり、とうとう完全に無くなってしまった。同時に板が変色し、薄く緑がかった色になった。水晶の方は吸収される様子が

顕著だった。黒い粒子が渦巻く中に赤い血の粒子が混ざり合い、一瞬だけ白く光った。その光が消えると、元の黒い渦に戻り、赤は何処にも見当たらなくなった。

「これで契約は完了となります。お疲れ様でした」

指先に包帯を巻いた後、受付係は事務的な声でそう言った。続いて注意事項を述べていく彼女。

「融資を受けた後、一定期間以内にお金の返済と利子の支払いを済ませなかった場合、銀行口座は閉鎖されます。現金取引以外では一切お金を動かすことは出来なくなりますのでご了承ください」

「現金以外で支払できるんですか？」

「はい。基本的にはカード払いが主流となります。これはリュウト様が物を買った場合、銀行に預けられているリュウト様のお金が、相手の銀行口座に移動するというものです。リュウト様から見ると数字が増減するだけとなりますが、きちんとお金は動いています。但し商人の中には現金取引しか受け付けないという方もいらっしゃいますので、幾らかは現金をお持ちになった方がいいでしょう」

どうやら大陸ではこの金属板　カードを使って支払をするのが主流らしい。感心しながらカードを眺めていると、突然手中にあったはずのカードが消えた。

「……あの、カード消えちゃいましたけど」

「カードはリュウト様の体内に保管されます。支払いなどでカードを出す場合は『マイカード・オープン』と唱えることで出すことができます。逆にしまう場合は『クローズ』です。またこのカードは身分証明証の役割も持っています」

龍斗は試しに「マイカード・オープン」と唱えてみた。広げていた左手の上で光が弾け、先程のカードが出現した。そのことに感心していた龍斗は、次の用件を思い出し、慌てて受付係に告げる。

「預金つてどうするんですか」

「預金ですね。では、今お持ちの硬貨を預けたい分だけこちらにお渡しください」

龍斗は麻袋の中からお金の入った巾着袋4つを取り出し、自分の腰につけていたものも外してカウンターの上に置く。と、ここで龍斗は説明の一端を思い出す。

「確か現金も幾らかは持ってた方がいいんですよね」

「はい」

即答だった。それを踏まえた龍斗は巾着の中身を幾らか整理した。それを終えた上で改めてお金を預けた。巾着袋を次々とだす龍斗に驚いていた受付係だったが、声を掛けられるとすぐに元の表情に戻った。流石のプロ根性というべきか。

「では預金金額をお知らせいたしますので、少々お待ちください」
しばらくして、眼鏡の受付係が戻ってきた。その表情はさっき会った時と違い、強張っているように見える。少々震える声で彼女が言った。

「ええと、リュウト様の預金金額ですが、10ドルク銅貨7546枚、1000ドルク銀貨639枚、10万ドルク金貨87枚、合計で……941万4460ドルク、です」

第7話：銀行帰りの会話

「……にしても1000万近い財産って凄いね」

「いいなーお金持ちー。ねえねえ、100万くらい頂戴よ」

「誰がやるかよ、自力で稼げ」

銀行を出た龍斗達3人は街の中を散歩していた。百聞は一見に如かず。実際に目で見ながら説明を聞いた方が覚えやすいし、地理的なことも把握できる。更に龍斗は霞、連と会話をする中で大陸の言葉を感じるようにしていた。元々他人よりも記憶力が良いので、一度さらっと説明されただけでも大分覚えることが出来た。会話が続くうちに話すことが無くなり、今は銀行でのこと、お金のことについてが話題となっていた。

龍斗に金を無心して断られた霞は頬を膨らませていたが、ふとあることに気付いた。

「そういえばさ、東君はなんであんなにお金持ってきてたの？」

「ああ。うちは俺以外全員死んだからな。大半は葬式の時にもらった香典だ。最初は泥棒に盗られるよりかマシだと思っただけだったんだが、舟を出した後に気付いてな。香典返しにお土産買って帰るつもりだった」

再び家族の死に抵触してしまった霞はしゅんとなり、ごめんと呟いた。連はそれを聞いて湧いた疑問をぶつけることにした。確かに軽んじて良い話ではないが、当の本人が乗り越えようとしているのだ。その気持ちを尊重してのことである。

「でも香典にしてもちよつと多すぎじゃないか？」

「一つは罪悪感だろう。2人とも知ってるだろ、うちが一度村八分にされたの。解消されたけどやっぱり申し訳ないって気持ちから多めにしたんじゃないかね。もう一つはよく知らないけど爺さんかお偉いさんに重用されてたことだろう」

「なるほどねえ」

「ところで俺も疑問に思うことがあるんだが」

お金の話題が続いたことで、すっかり忘れていた疑問を思い出した龍斗。

「ドルクが金の単位なのは分かる。でも銅貨が10、銀貨が1000、金貨が10万っていう値段設定は何だ？ 今ひとつわからないんだが」

「それはね、大和と違って硬貨自体にお金としての価値が無いからだよ」

霞が答えてくれたのだが、あまりにあっさりしすぎで今一つわからない。同じことを思った連が補足説明する。

「つまり大陸ではあれはただの金属の塊と見て値段を決めているのさ。だから1グラム当たり何ドルクっていう決め方。ただ、元々お金として使うために作られているから一枚一枚価値が違うという意味がない。つまり硬貨はどれも同じ量の金属で作られていることになる。同じ量ということはどれも重さが同じだから、結局貨幣は値段が安定しちゃうんだよね。……で、安定しているからまだ取引にも使えるわけだ」

「ただの金属として、か。もう一つ……これは銀行への信頼に触れちまうけど……あれ大丈夫なのか？ 例えばここが他所の国に襲われたりしたらやばい、というか今だって狙ってるところありそうだな。何せ大陸中の金が集まってるわけだし」

「ははっ、流石は忍、いいところに気が付くね。それについては本当に大丈夫なんだ。端的に言えば大陸にある全ての国は銀行の融資を受けている、つまりは銀行に借金がある。おまけに国を動かすためのお金のほとんどが銀行にあるから何処も銀行に頭が上がらない。もしオリジアに危害を加えようとする国があつたら即座に経済制裁が加えられる。お金を一切動かせなくなるから国が機能しなくなるね」

「国が自力で大金を動かすのは大変そうだな……国にとっても利益が無いのか」

「あ、それと銀行の運営とオリジアの統治は商人ギルドがやってるの。ギルドは何処の国にも属さない独立した組織。それにオリジアは念のために全ての国と不可侵条約を結んでる、だから兵力が無くても国がやっていけるんだよね」

この日龍斗は度量衡の単位、店の看板、お金についてのあれこれを学んだ。それに加え、龍斗は新しく服を調達した。龍斗が着ているのは未だ大和から持ってきた着物に袴。大和では当たり前な格好なのだが、大陸には無い服装のため街を歩けば嫌でも目立ってしまった。人の注目を集めることを嫌う龍斗としては一番に避けたいことだった。まだ少し抵抗があるが、連や霞曰く「そのうち慣れる」とのことだった。

太陽が地平線に沈む頃、2人と別れた龍斗はデイビス夫妻の家に戻った。扉を引くと昼間かと思うほどに明るい光と喧騒が龍斗を迎え入れる。デイビス夫妻の家は旅亭を経営していた。昼間は開店休業みたいなものだが、夜になれば食堂は酒場となり、連日酒飲みがわいわいがやがや騒ぎ立てる。そうして酔いつぶれた客に追加料金で寝床を提供したのが旅亭の始まりらしい。やがては最初から宿泊を目的とする客も現れ、今のスタイルが定着していったのだとトマスは語った。龍斗はそうして客に提供する部屋の一つを化してもらっていた。

食事は基本的に食堂で行う。龍斗は騒ぎの中心を外れるように、端の方のテーブルに座った。

第8話：地図と決意

龍斗がランドレイク大陸に漂流してから1ヶ月が過ぎた。この間龍斗は特に何をするといいこともなく時間を過ごしていた。否、実際には何をすればいいのかわからなかったと言った方が正しい。霞も連もこのオリアで仕事を見つけ働いていた。だが龍斗はそれらの職に就きたいとは思わなかった。かといってこのままデイベス夫妻の所で厄介になっていくわけにはいかない。なら旅亭で働くか。その選択も龍斗には出来なかった。

何せ最近まで龍斗は忍になることを目標としていた。忍とは影なる者。諜報や暗殺、破壊工作、情報操作を生業とするが故に、その存在は表沙汰には出来ない。龍斗は15歳、既にそういった任務を任せられ、遂行していた。その中には当然の如く暗殺 人を殺めるものも含まれている。

連は龍斗と一緒に基礎体力の鍛錬をした時期がある。だが連は忍になるためにしていたわけではなく、実家の空手道場を継ぐためだった。無論殺人の経験など皆無である。

一方霞は女忍者 俗に言うクノーになることを目標としていた。龍斗、連と同じ年で龍斗と同じ忍の道を進んでいたが、決定的に違うのは3年前に行方不明となったこと。この時点で彼女は11歳。忍の任務が与えられるのは12歳からなので、彼女はまだ忍として動いたことが一度もない。即ち、人を殺めた経験がない。

（そう、俺の手は既に何度も血潮に濡れている。そんな俺が一般人としてのこのうと暮らしていけないはずがない。今更……道は引き返せない）

龍斗は2人が羨ましかった。血の穢れを知らず、自分の道を進んで行けたのだから。

そんなある日、龍斗は街の商店で大陸の地図を見つけた。そのま
ま何の気なしに購入し、旅亭に戻った。衝動買いと言っても過言で
はないかもしれない。食事の後落ち着いた時に改めて見ると、何故
これを買ったのだらうと自分で不思議に思ったほどである。値段は
1枚3万ドルク。旅亭の宿泊料が一泊2食付で2000ドルク、林
檜1個が100ドルクということなので、かなり高価な買い物であ
る。にもかかわらず使いようがない。なんとという無駄遣いだらうか
だがこの地図を手にした時から、龍斗の心境に変化が起きたのも
また確かだった。部屋にいるときは地図を見て時間を潰すようにな
っていた。地図の何を見るのか、そして何を思うのかは大体いつも
同じだった。

龍斗の視線はまず地図の右端、つまりは東端に向かう。そこにあ
るのは様々な形の島が南北に長く連なっている様子。その横にはタ
ツノ列島という文字が書いてあるが、タツノ列島よりも『大和』の
方が龍斗にとっては馴染みがあった。

（大きめの島が上から順に玲角島、徳間島、御蔵島。更に数個の島
を合わせて大和か。……けっこう広いと思ってたが、小さいな。で、
これに乗って西へと）

龍斗の視線はタツノ列島から左側へと進んでいった。海には大き
な渦が描かれているが、あまりの大きさに紙から切れてしまってい
る。渦の中心に書いてある『トリトン海流』から更に左、『ランド
レイク大陸』で目を止めた龍斗は母から聞いた言葉を思い出す。

「私が生まれ育ったのはとても大きな陸地だった。世界はここだけ
じゃない」

それはぼつりと呟く独り言のようなものだったが、龍斗の耳に強
く残っていた。そしてそれは、大陸に流れ着いた今、龍斗が思うこ
とでもあった。

（井の中の蛙大海を知らず、か）

龍斗は自分が今いる所、『オリジア』と書かれた場所に目を向け
た。街の様子は非常に賑やかで、かつて龍斗が住んでいた玲角島よ

りも広い面積を持つが、それでも竜の尾の一部でしかない。つまりまだ龍斗は大陸の中のごく一部しか知らないのだ。

(どうせなら、もっと大陸を知りたい。知識は多い方がいい。無くて困ることはあってもあつて困ることはない)

最終的に龍斗はそう考えるようになった。

そして龍斗はついに決意した。自分の進む道を定めた。多少迷いはあるものの、自分が思う条件を満たしている職業は他になかった。(冒険者、か。正直気乗りはしないが……今まで培ってきた戦う力を失うのは俺には出来ない。どうせなら縛られずに生きていきたいなら、この道しかないか)

この大陸には職業ギルドというものがあり、何か職に就きたい場合はそれに所属するのが一般的である。だが、大抵のギルドは加入に際して厳しい条件が課される。

例えば銀行の経営も行う商人ギルドでは、お金の計算はもちろん社会経済についての知識も必要となる。それらを問うための筆記試験に合格しなければギルドに入ることは認められない。

例えば鍛冶屋ギルドでは、親方と呼ばれる中堅の職人の下で何年も下働きを経験した後、実技試験を受け合格しなければならぬ。

それに比べ冒険者ギルドには加入条件が一切無かった。その理由は至極簡単、冒険者の世界は完全な実力主義だからである。力が無ければ生き残れない。常に死と隣り合わせと言つていい世界。だが逆に言えば、力量さえあれば任務を次々こなして荒稼ぎすることが出来る。それ故に冒険者という職業は大陸で最も人気のある職業だった。

更にギルドは、全ての国から独立した組織である。商人ギルドはオリジアという拠点を持つ例外的なものだが、承認が得られれば何処の国で商売をしても構わない。鍛冶屋もまた然り。冒険者では、関所を通る時の通行料が半額になる。それも決め手の一つとなった。

思い立ったが吉日と、龍斗はすぐに冒険者ギルドに行き登録を済ませた。ややこしい手続きが必要なのはと内心不安だったが、カードを水晶にかざすだけで登録は完了した。

だが龍斗にはもう一つ決意したことがある。

第8話：地図と決意（後書き）

ちよつと焦ったかな……

ハアorz

素人の拙い作品ですが感想など頂けると有難いです。

第9話：雁は発つ

『忍びても 景色晴れぬと 雁は発つ 跡は濁れど 情けは無用』

そう書かれた紙を囲うように座る4人の人間がいた。皆がその紙に書かれた文句を見つめ、眉にしわを寄せていた。そのうちの1人、ベラスが金髪を振り乱した。

「全然分らないわ。何なの、これ」

その隣にいた茶髪の男性、トマスもベラスに倣って首を振った。肩をすくめ、両手を上に向けるおまけ付きである。

「僕もお手上げだ。こんなのは見たことない。……君らはどうだい？」

彼の視線は黒髪の少年少女、連と霞に向けられた。同じ大和出身の彼らなら、何か分かるかもしれないと思ったからだ。その声に反応した連が顔を上げた。

「あ、そうか。お2人は知らなくて当然ですね」

そう前置きしてから説明を始める連。

「これは俳句、じゃないな、短歌っていうものです。美しい景色を見た感動とか、自分の気持ちを誰かに伝えたいときとかに詠む……まあ、詩ポエムみたいなものですよ。ただ、単なる詩と違っていろいろ制限があるんですけど」

「制限？」

聞き返してきたベラスに、連は答えた。

「ええ。俳句だと五七五の計十七音、短歌はそれに七七を加えた計三十一音で全てを表現するんですよ」

「へえ、東洋の神秘だね。それで、意味は？」

「んとね、『いくら我慢して待ってても、空の景色は晴れにならず曇っている。だから渡り鳥は飛び立っていく』前半部分はこんな

感じかな」

霞の回答にますます訳が分からないと2人が首を傾げる。

「えっと、……だから、何なんだろう？」

その様子を見た連が苦笑を浮かべながら説明する。

「それは文字そのままの表の意味です。龍斗がわざわざ置いてったんだから、必ず別の意味があるはずですよ」

「別の意味？」

「そうそう。東君、長く家を空ける時たまにこういうの残して行っただんだよね。で、毎度何か伝言を隠してたから、これもそうだろうなって」

そうして霞と連による解説が始まった。デイビス夫妻は旅亭の仕事があるのでここで退席した。

「忍ぶはもしかしたら『偲ぶ』がかかってるんじゃない？」

「景色は……『気色』？」

「後は何かあるかな……」

30分後、仕事が一段落した夫妻は連と霞の所へ向かった。だが扉を開けた瞬間、中の空気が重くなっていることに気付いた。連は肘について頭を抱え、霞は椅子に全体重をかけて天井を仰いでいる。その様子にただならぬものを感じたベラスが声をかける。

「ちよつと、2人ともどうしたの、何か分かったの!？」

ベラスに視線を向けた連は、顔を起こした。

「ん、ああ、ベラスさん。ええ、大体分かりましたよ、奴の言いたいことは」

「それで、何だつて？」

トマスの質問に脱力した声で霞が答えた。

「『いくら故郷を懐かしんでも、気持ちを押さえようとしても、自分の気は晴れない。だから俺は渡り鳥の如くここを離れていく。ちよつと面倒事残して行っちゃうけど、心配するな。』……全体的に

まとめるとそうなるね」

部屋の重い空気がデイビス夫妻を飲み込んだ。驚いた表情のまま固まっている。やはり結構ショックを受けた様子だ。ある程度こうなることを予想していた連はフォローに入った。

「まあでも、お2人にはちゃんと感謝してますよ。ほら」

テーブルの上に置いてある3枚の金貨を指さす連。

「1泊2食で2000ドルク、1ヶ月30日で6万ドルク。30万ドルクは明らかにおかしい。命を助けてくれた。食住を提供してくれた。それに対するせめてものお礼のつもりでしょう」

「そんな大金……とても受け取れない……」

「駄目ですよ、ここは受け取るべきですよ」

「そうですね。それが龍斗に対する礼儀ってもんです」

連も霞もベラスに反論した。そこからは受け取れ、受け取らないの堂々巡り。このままではらちが明かないとトマスがある提案をした。

「えっと、なら4人で山分けにするのはどうだい？ 龍斗君は色々教えてくれた君たちになんて感謝しているはずだろ。なら、君たちにも受け取る権利はある」

全額はもらえないので、連や霞にも分配することで額を減らそうという考えである。だが連も霞も目を丸くして首を振った。

『受け取れないですよそんなの!!』

こうして立場が入れ替わり、再び堂々巡りとなってしまった。いつの間にか日は傾き、窓から入る光がテーブル上の金貨を照らしていた。

最終的にこのお金は、デイビス夫妻が10万ドルク、連と霞はそれぞれ5万ドルクを受け取るということで決着がついた。残った10万ドルクは教会に寄付することとなった。

第10話：無常の闇を斬り裂かん（前書き）

総合評価10ポイント

お気に入り登録件数5件

いやはや、有難うございます。本当に嬉しい限りです。

第10話：無常の闇を斬り裂かん

鬱蒼うつそうと生い茂る緑の中、草一本生えていない一筋の地面が蛇行していた。その道の真ん中に1人の少年が立っていた。鋭い眼光で周囲に目を走らせた少年　龍斗は麻袋をたすき掛けにし、腰を落として構えを取った。左腰には祖父の形見である脇差が、紐を通して括り付けてある。左手で鞘を固定し、右手で柄つかを逆手になるように軽く握る。そのまま目を閉じ、周囲の気配を探りながら呟く。

「森羅万象、無為自然……『即応の霧』」

忍の世界にはその道を歩む者にしか伝授されない秘伝の技というものがある。それらを総称して「忍術」という。今龍斗が呟いたのはその忍術の一つ『即応の霧』。霧のように意識を広げ、より広範囲の気配を察知するという技である。

しかし木陰や落ち葉の中に隠れる『葉隠の術』、話術によって相手を翻弄する『五車の術』あたりなら実際に使うことが出来るのだが、口から火を噴くなど攻撃としての『火遁』、蝦蟇がまを呼び出す『幻術』、分身を作り出す『分身の術』など、忍術と呼ばれるもの的大半はおよそ人間業とは思えない物ばかり。『即応の霧』も現実的にはあり得ない術の1つと認識されている。しかし気配の察知には精神の統一が必要となる。故に今では短時間で精神統一するためのまじないという認識で『即応の霧』発動の呪文が唱えられる。龍斗が唱えたのも本気で効果発動を信じているからでなく、精神統一の認識からであった。

迫る気配を探り当てた龍斗は左足に体重をかけ、右足を滑らせて構えを直す。

「無常の闇を切り裂かん……『暁』」

脇差の銘を語り、左手の指で鯉口を切る。その刃が露わになった瞬間、森の陰から唸り声と共に一匹の犬が現れた。大きな犬歯をむき出しにし、尻尾を立てて龍斗を威嚇するその姿は、遠目に見てもかなりの大型であることが分かる。その膂力も並大抵ではない。一瞬身を屈めたかと思うと、次の瞬間には龍斗の喉を噛み千切らんと彼の身長よりも高く跳躍する。

（やはり狙いは喉笛か、甘いな）

龍斗が野犬と戦うのはこれが初めてではない。玲角島にいた時、忍の修行の一環として山籠もりをしたことがある。それは大陸の言葉で言えばサバイバルと呼ばれるもので、人里離れた山の中たった1人で1ヶ月間、自給自足で生き延びねばならない過酷なものだった。その修行によって野生動物との戦い方や自然の中で生きる術、薬草の知識などを学ぶのである。

野犬は短期決着を好む。跳躍して上から攻撃すれば相手の視線もそれを追うために顔が動く。顔が上を向けばどうなるか。狙いである急所の喉笛が無防備に晒されるのだ。

だがこの戦法には1つ弱点があった。

龍斗は体重を右足に移動させ、右腕を斜め上へと振り上げた。逆手に握られた脇差の刃が、戦法の弱点 無防備となった野犬の腹に突き刺さる。勢いそのままに腕を振り切ると、野犬は自重によって刃から抜け落ち、地面に叩きつけられた。腹から赤い血を溢れさせ、血だまりを広げながらもなお立ち上がるうとする野犬の首筋に脇差を当て、龍斗はその喉笛を引き裂いた。

（さて、あと何匹だ）

動かぬ死体となった野犬から目を離し、辺りを見回す龍斗。その顔には、その目には人間らしい情など欠片もない。命を奪うことに慣れ、殺すことに何の躊躇ためらいもない殺戮者さつりくしゃの目である。だがそれは同時に、相手にやられて自分が命を失う覚悟がある、ということも意味している。

『忍たるもの、生死あらば情を断つべし』

やはり龍斗には忍の教えが染みついているのだ。そして忍である以上、一切の油断は禁物。野犬が単独で動いているというのは樂觀すぎる思考である。少なくとも五〜六匹、多い時には数十匹という単位の群れを形成しているはずなのだ。

複数の気配が迫るのを感じ取った龍斗は腰を落として構え直し、脇差『暁』を握る手に力を入れた。

「ふう、終わったか」

血だまりに沈む10匹の野犬を見ながら龍斗が言った。気配を探ってもこちらに向かつてくるものはない。着物と違い、大陸の服は肌に密着する作りであるために体がどれだけ動かせるか不安だったが、実際戦闘をしても問題はなかった。龍斗は足を曲げ、野犬の顔に近付いた。

（これが、ハウンドドッグか……確か上顎の牙2本を取るんだっただか）

龍斗はオリジアを出るにあたって1つの任務^{クエスト}を受けていた。その内容は、ハウンドドッグ及びワイルドボアの討伐。次の街に行くために必ず通らなければならぬこのアサンの森でのクエストだったので、ついでに受けていたものである。

討伐系のクエストを受けた際は、対象を仕留めたという物的証拠が必要となる。何を何体倒したか、その証明のために対象の体の一部を持ち帰るのだ。ただ持ち帰ればいいというものではない。ギルドが指定した特定部位を持ち帰ることで初めて討伐完了となる。今回討伐対象となっている2種の特定部位は牙。なので龍斗はその部位を回収する作業に入った。他の歯より幾分大きい犬歯の上に脇差の刃を突き刺し、歯茎から抉り取った。

残り9体のハウンドドッグからも牙を回収すると、龍斗は死体の前足を両手で掴み、森の中へと投げ捨てた。野生の肉食動物は死肉

を食らうものが多い。人が通る道路のど真ん中に放っておけば、その肉を食らうために本来道路まで出てこないはずの野生動物が道路に出てきてしまう。そうなれば通行の邪魔どころの話ではない。なのでギルドの規則として道路上に死体を残さないことが定められている。道路上にさえ残さなければ後はどう処分しても構わないとのことだったので、龍斗は文字通り、好きなように放り投げたのだ。

死体を処理した後、龍斗は地面に耳をつけた。こうすることで近くに川があるかどうかを探ることが出来る。幸いにもすぐ近くにありそうだったので、龍斗は森の中へと入っていった。途中で自分が放り投げたハウンドドッグの死体を1つ見つけた。龍斗は再び横に放り投げ、更に進んで川に出た。

着いてみると川というよりは小さな清流であった。しかし龍斗にとってはそれで十分だった。回収したハウンドドッグの牙を1本1本水にさらし、脇差を使って歯茎の肉をそぎ落としていく。血や肉は時間の経過と共に腐敗が進み異臭を放つ。大抵の冒険者は気にせずそのままにする。ギルドとしても部位の回収さえできればそれでいいので、特に気にすることは無いというのだが、龍斗は道中で悪臭が移るのを嫌った。

20本の牙を全て洗浄し、オリジアで買った2つ目の麻袋に詰め込んだ。

（さて、そろそろ戻って進みますかねえ）

そう思って歩き出したその時、遠くで派手な破壊音が響いた。

第10話：無常の闇を斬り裂かん（後書き）

今更ですが……このタイトルのつけ方どうなんだろう
いいのかなこれで…？

忍術についてですが『即応の霧』は自分で考えだしたオリジナルの
技です。実際にはそんな技はないです。

第11話：無常の闇を斬り裂かん 2

（何なんだ、さっきの派手な音は）

龍斗は木々を飛び移りながら走っていた。地上を走るのとは様々な野生動物に遭遇する可能性があるために危険である。この辺りに生息する動物は木の上に登ることはないの、これが最も安全な移動経路ということになる。

（そついやさっきの俺みたいに路上でも襲われることがあるんだよな。ということは、馬車か何かがある森の中に突き飛ばされた可能性が高いな）

「其の速きこと風の如し……つっても変わらねえか。もうちよい足速くならんものかね」

1人悪態をつく龍斗だが、その声に応えるものは誰もいない。焦る気持ちを押さえながら龍斗は森を突っ切っていった。

「あー、やつぱりな……」

音の発生源を見つけた龍斗は、木の上からその様子を眺めていた。案の定、そこには道路から突き飛ばされた馬車が1台転がっていた。恐らく馬車をそのようにした張本人、ワイルドボア数体を取り囲み、自慢の長い牙を以て馬車を大きく揺すっていた。馬車を引いていた馬は既に息絶え、巨体の猪いのししがその肉を食らい始めていた。

暫く観察していた龍斗はあることに気付いた。耳を澄ましてみると、馬車が揺れる度に人間のうめき声が聞こえた。中にまだ人がいる。

（さて、体長は1メートル程のが3体か。『暁』……じゃあ時間かかるな。ならここは……）

龍斗は左手を背中に回した。麻袋と同じように、左肩から右腰へとたすき掛けした太刀の鞘を掴む。

「父さん、頼むぜ。……早霧の山に茜差す、『東雲』！！」

父の形見である太刀『東雲』の刀身を露わにすると木から飛び降り、着地と同時に横薙ぎの一撃を放った。それはすぐ傍にいたワイルドボアの前足を斬ったため、相手はバランスを保てず横倒しになる。隙だらけになったその首筋に刃を当てると、躊躇いなく刀を引いて血しぶきを上げさせる。と次の瞬間、気配を察知した龍斗は後ろに転がった。体制を直して見ると、赤く染まった猪に進路を阻まれた別の猪の姿があった。

（ちっ、俺としたことが……気配捉えるの忘れてたな。だから俺はまだまだなんだ）

かすった左腕の痛み顔に顔を歪めながら自身に悪態をつく龍斗。だが今はそれどころではない。瞬きで気持ち切り替え、太刀を両手で構え直す。

「森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

そう呟き、今度は敵の気配を逃すまいと意識を全体に向ける。先程避けたワイルドボアがこちらに突進しようとした瞬間、龍斗は数歩分横跳びし、馬を食らう一体に向かって走り出す。こちらに気付いた猪は顔を振り、龍斗を弾こうとするが空振りに終わった。猪の背に跳び乗り、両耳の間に太刀を突き刺す。

だがその後のことを考えていなかった。猪が派手に暴れ出したため、太刀を抜くことも降りることも出来なくなった。両足で胴体をはさみ、太刀を握って振り落とされないようにしがみつく。流石にこの状態から普通に飛び降りれば無事では済まない。形見の太刀を見捨てる気は毛頭ない。暴れる反動を利用しつつ何とか片足を背中に上げた龍斗。太刀を握る手の力を強め無理矢理空けた手で脇差を抜く。

ワイルドボアが飛び上がり、後ろ足2本で直立するような格好になった。好機とばかりに龍斗は後ろ足の1つから鮮血を上げさせる。全体重がかかっている足が脱力しバランスが崩れる。その瞬間に龍斗は太刀を手放し、跳び下りた。倒れてもなお足をばたつかせる猪

に背中側から近付き、体当たりを受けないようにしながら首や腹を滅多刺しにする。やがて動きが小さくなり、ぴくぴくと痙攣するだけとなった。頃合いと判断し、脇差を直した龍斗はワイルドボアから太刀を引き抜いた。血糊を振り払いながら気配を探る。

(もう1匹いたはずだが……まあいい)

太刀『東雲』を鞘に納め、龍斗は馬車を確認した。ワイルドボアの牙にやられ所々布が破れている。車輪は大破しているし木枠にもひびがある。馬車としては使い物にならないだろう。

(それでも中に侵入できるようなところはないな。ひとまずは無事か)

見当をつけた龍斗は馬の血に濡れた横向きの御者台から中に入った。

第11話：無常の闇を斬り裂かん 2（後書き）

今までに比べると文量少ないかな。いつもは2000字越えなんです。今回は1600ほどかな。別に意図しての事でないので特に気にしていませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0606y/>

龍の逆鱗

2011年11月21日23時49分発行